

## いやな奴か

### 1. オオスズメバチ

遊歩道脇のスズメバチへの注意書きは、オオスズメバチのことをさします。打吹山では秋に危険な種であり、藪に入ることが襲われる原因になります。事故の多いキイロスズメバチは公園や人家に近い場所で営巣し、打吹山の林内では見ていません。腹部の黄と黒のはっきりした縞模様で、腹端が黄色であることが識別点です。



オオスズメバチの営巣はほとんどが地下の空洞で、シイの大木の根元にできる空洞を利用しています。春、女王バチが単独で場所を探し、営巣を始めます。働きバチが生まれると巣の拡張や餌集めは任せて、産卵に専心することになります。個体数が最大になった秋、新女王バチと雄バチが生まれると巣は解散します。新女王バチだけが越冬し、冬までに他は死んでしまいます。したがって、古い巣はもう使われることはありません。

毎年同じ場所に営巣しないので、注意が必要です。出入りしている場所には近づかないようにしましょう。一定範囲内に入らなければ攻撃されません。秋口になると巣の幼虫数が増えます。しかし、毛虫などの餌が少なくなるため、ミツバチの巣を襲い、成虫や幼虫を餌にします。養蜂家には嫌われていますが、毛虫などを捕食することは、農業等の害虫を駆除してくれていることにもなります。

### 2. ヌスビトハギ

遊歩道脇、林縁に生える1年草です。夏になってから花を付け、果実を実らせませます。上部を刈り取ってもまた茎を伸ばすため、秋遅くまで果実があることもあります。



この「ひっつき虫」は人の歩く場所に生えますから、いつの間にか衣服に実がくっついていくことになります。こっそり知らぬ間につくことで「ヌスビト」という説と、泥棒の忍び足の足跡が2連の果実に似ているという牧野富太郎説があり、呼び名のいわれの難しさがわかります。伝承は漢字ではなく、音のみで伝わっているため、意味不明のものが多々あります。

花を見ればマメ科ということがわかります。葉は違いますが、ハギの仲間と似た花ですからハギでいいのですが、語源にはいろいろ説があるようです。古くから呼ばれているものほど難しいようです。

豆のさやは薄く、2節からなり、容易に離れます。さやの横の茶色になった部分は小さな鉤がたくさん付いています。これが衣服にくっつくのですが、鉤が短いため離れやすくもあります。したがって、動物に実を散布してもらおう効率がよくなるのです。くっつきやすく離れやすい、この相反する性質を成立させた賢い草です。